新しい海洋文化の創造

沖縄国際海洋博覧会への期待

宇田道隆

沖縄国際海洋博が七月二〇日から開かれて、明昭和五十一年一月十八日までの一八三日間続く。「海―その望ましい未来」を標語にした世界最初の海洋に関する特別博覧会が、亜熱帯の濃青の海に囲まれた明るい陽光の珊瑚礁の島、沖縄を会場として催されるのである。それは沖縄の本土復帰を記念する歴史的な大行事であるが、人類の未来を担う海の認識を深めて、約四〇ヵ国の出品参加の意志を表明して来ている国々を中心に各国の人々が集って交歓し、互いに海洋時代の幕明けを語り合う好機でもある。

一九七二年春にテーマ委員として私どもが沖縄海洋博の基本理念を練ってから既に三年数ヵ月を経過し、今や現地沖縄では準備万端成って花々しく開幕を迎えるのであるが、この間世界の経済社会環境は想像外の激変を見たのであった。一九七二年六月国連人間環境会議（ストックホルム）での環境宣言が発せられ、世界人口の爆発的激増に対処するための世界人口会議（一九七四年、ブカレスト）、世界的気象海況異変が食糧欠乏に拍車をかけるに備えての世界食糧会議（一九七四年、ローマ）、オイル・ショック等もあって国連の世界エネルギー会議や資源総会（一九七四年、ニューヨーク）、さらに海の新秩序を求める国連海洋法会議（一九七四年カラカス、一九七五年ジュネーブ）等の大会議が立て続けに開催せられた。正に世紀的な人類生存の重大転機に立たされて、世界的に省エネルギー・消費抑制型産業に再編し、エネルギーや物資の備蓄を進め、「価値ある静止」的平衡の時代に先進国を頭に転移しようとしている。このような変化は元来沖縄国際海洋博の発企当時には全く予想されていなかったといってよい。大阪での万博（一九七〇年）は日本近代化一〇〇年を記念しての行事であったが、沖縄海洋博では急に海洋に人類の関心が高まり、その未知を追求する海洋科学という以上に、特にその豊富な海洋資源（食糧、エネルギー、鉱物、淡水、塩など）の開発、海洋観光レジャー産業などから広く未来の人類のための海洋文化からみて、美しい沖縄の海を舞台に展示し、沖縄の海洋産業と経済振興に役立てようというねらいがあった。ところが世界的情勢の変転は当初よりも一層切実にこの世界人類の運命にかかわる海の未来についての対話の必要を人々に訴えるようになった。

そして海の空間と資源の利用が迫り来る未来の困難を打開する唯一の路になろうとしている。特に人口の割合に国土の狭隘で陸上資源に乏しい、日本にあってそうであり、沖縄は正にその雛型である。海洋の学術的基礎からこれらの問題の本質的な討議のための国際シンポジウムなども必要として計画されている。

海洋は人類共同の財産

統一テーマは「海―その望ましい未来」となっている。それは先ず、海の認識から出発する。われわれ人類をはぐくむ母なる海、ふるさとの海、人類の文化を育てて来た海。宇宙船から眺めた地球の青い輝きは、地表の七〇%余を占める海あればこそである。人間の住める気候の温和さは海によって保たれているといっまだ見当もつかないほどのものがある。

しかし他面どこでも海洋汚染が悩みの種になって来ている。現実の海は巨大とはいえ、有限な空間であり、内包する資源もまた有限で、大切に使用すべきである。更新可能な生物資源としての魚貝藻は、栽培、ポジウムなど海の経営の基本哲学を生むものにもなる。

この博覧会施設と跡地利用も沖縄のため、また国際的にも意義深い科学研究センター（亜熱帯、熱帯圏）の構想が練られている。そこで大切なのは、自然環境

博の基本理念を練ってから既に三年数ヵ月を経過し、今や現地沖縄では準備万端成って花々しく開幕を迎えるのであるが、この間世界の経済社会環境は想像外の激変を見たのであった。一九七二年六月国連人間環境会議（ストックホルム）での環境宣言が発せられ、世界人口の爆発的激増に対処するための世界人口会議

沖縄国際海洋博の発企当時には全く予想されていなかったといってよい。大阪での万博（一九七〇年）は日本近代化一〇〇年を記念しての行事であったが、沖縄海洋博では急に海洋に人類の関心が高まり、その未知を追求する海洋科学という以上に、特にその豊富な海洋資源（食糧、エネルギー、鉱物、淡水、塩など）の開

海洋は人類共同の財産

統一テーマは「海―その望ましい未来」となっている。それは先ず、海の認識から出発する。われわれ人類をはぐくむ母なる海、ふるさとの海、人類の文化を育てて来た海。宇宙船から眺めた地球の青い輝きは、地表の七〇%余を占める海あればこそである。人間の住める気候の温和さは海によって保たれているといって過言ではない。

海の幸の第一は、水産で、伝統的な海の恩恵といえよう。海上の往来、民族の移動、文化と物資の伝達交流などに、海上の道が大古から活用されて来た。海はまた、最大の水源、水がめ、海水淡水化産業の対象でもある。淡水化して残る海塩は食塩、化学工業資源でもある。更に波力、温度差、黒潮などの海洋エネルギーを利用する発電は、日本近海に豊富で、永続的に利用できる、無公害のエネルギー資源である。もちろん海底に埋れている石油、石炭、海中の重水素、ウランなどの資源があるが、掘りはじめると数十年で消滅する。

もちろん海底の鉱物資源には沿岸のダイヤモンド、砂金、白金、砂鉄、錫、宝石原石（サファイヤ、ルビー等）に深海底のマンガン団塊、リン灰土などが極めて有望な資源として既に世界的に開発が進行中である。

海には本来われわれの心を開放にする自由さがあり、寛大さがある。海は資源の宝庫というのみでなく、健康な娯楽、観光、遊技レジャー、いこいの場を提供する。海では海底電線を通じての電流、ソーファーなどを通しての音波など、海上の電波や、人工衛星と海上ブイの間のレーダーなどを通じて通信事業などが著しく進歩した、未来の海にはわれわれがよく見て、研究を進めればどんなにすばらしい発見と共に新たな海の利用上注目すべきものが豊富に内包するか、まだ見当もつかないほどのものがある。

しかし他面どこでも海洋汚染が悩みの種になって来ている。現実の海は巨大とはいえ、有限な空間であり、内包する資源もまた有限で、大切に使用すべきである。更新可能な生物資源としての魚貝藻は、栽培、養殖漁業によって計画生産を永続的に確保できる。ところが今や、母なる海も人間活動の誤りによる汚染で本来もっていた自浄作用も失った「病める海」、「死の海」に次々と変貌して行った。陸上も工業の発達や自動車文明に比例して逆に大気、水、土、生物とも汚染し、大変住みにくい場所になり、白砂青松と呼ばれた海浜も消え失せている。こんな事態を直視して、世界人類の運命を左右する海洋の未来の対話の場として世界で初の沖縄海洋博が国際的に開催されたのだから、正しい人間生活の在りかたを示す海洋環境の保全と改善の方途が探られるのも当然であろう。しかも沖縄の美しい海を中心に、海洋観光資源に富み、海洋科学の面からも興味深い近海を紹介し、太平洋民族文化史上黒潮に浮ぶ海の十字路ともいうべき沖縄方面の民俗、舞楽、工芸、言語、海運、貿易、水産関係を広く展示しようというのである。

海洋の汚染のない産業を管理して永続できる海の生産による人類の平和と繁栄を約束させ、日本を含めた世界の新しい文明創造の方向づけをしようというのがこの沖縄国際海洋博の特徴である。海洋を人類共同の財産として、海洋資源と海洋空間の開発利用で、領土争いや侵略の舞台にすることなく、真に平和的共同利用の場としての認識を深めようというのである。単なるお祭り騒ぎに終ることなく、国際親善をはかるための国際会議や国際共同研究とか学術交流を含めたシンポジウムなど海の経営の基本哲学を生むものにもなる。

この博覧会施設と跡地利用も沖縄のため、また国際的にも意義深い科学研究センター（亜熱帯、熱帯圏）の構想が練られている。そこで大切なのは、自然環境を破壊することなく、人間が自然に対して謙虚に、自然の中で人間性を回復できるように、海と人間の永続的な調和をはかって、新しい海洋文化を創造する文明の光をもたらすことで、これこそ沖縄国際海洋博の大使命というべきであろう。

このような総論はそれを十分ふまえた各論の実行によって真の花が咲くものである。とかく世の中には、「総論と各論とは別だ。立て前と本音はちがう」とする行き方があって、それがともすれば羊頭狗肉どころか、全く意外な、「こんなのならやらねばよかった」といった結果に終ることがあるので、そうならぬよう、当事者の深い戒心を必要とする。環境破壊・汚染など特に厳戒すべきであろう。インフレ、鬼ヒトデによる美しい珊瑚礁食害の騒ぎ、土地買占め等々の暗い影を払いのけたい。

未来の理想モデルを沖縄で

沖縄近海では冬は季節風、夏秋は台風で波浪が起こされるが、これを利用する波力発電、風力発電、又燦々と照り注ぐ太陽の光熱を利用する太陽発電、さらにそれらを水素エネルギー転換（海水の半電子電極による電解法）で輸送・貯蔵も思うまま、近海の黒潮の莫大な海流エネルギー利用発電、南洋（赤道反流域）を含む海水温度差発電などは無公害で、地球の続く限り得

的基礎からこれらの問題の本質的な討議のための国際シンポジウムなども必要として計画されている。

られるエネルギー資源であり、手近に入手できて、外国から無理をしてウランや石油のように原料を輸入する必要もなく、あと三〇年で無くなるなどの心配もいらない海洋エネルギー開発である。これなら漁業者も大歓迎で、漁業振興冷蔵庫などに直ぐ活用できる。離島の旱魃で苦しむ所も海水の淡水化で水の孤島苦が消滅し、おまけに海塩の副産物まである。又市町村の屎尿等の下水、工場廃水も完全処理をこの際沖縄海洋博を機会に科学的に行ったモデル的な沖縄が展示され、都市下水の栄養塩(リン、チッ素負荷)化して農水産食糧となる「資源再生循環工程」の実演こそ望ましい。単なる「もうけ」本位の利益追求型企業でなくく、真に人道的、未来建設的な産業のあり方こそ各国からの参加者や見物客にもアピールし、世界的な意義ある博覧会ともなり、輸出通商を望まれる世界的公害防止産業としての成長発展を、今後に期待できるであろう。一部企業の視野が、従来の近視的な、早急な、利益回収方式で、手段を択ばぬ短期決戦型が、結局は東南アジアなどで排斥を食うような現状から、もっと長期遠謀型の創造的産業通商方式に将来転換すべきではないだろうか？　その第一歩がこの沖縄海洋博で見られるとすれば、その意義は画期的なものというべきで、通産省企業局所管で海洋産業経済振興に重点を置いて推進した、この沖縄国際海洋博が生きて来る。本土の悪い所、欠陥とされたものは一掃し、改善された未来の理想モデルを沖縄海洋博で示し、本土、沖縄の一体感を逆に本土改善のスプリング・ボールにできるならこの海洋博も大成功であろう。

海洋の開拓、経営、未来の海洋文明の建設の門戸を示すのが沖縄海洋博であって、すべてはこれからである。アクアポリス、海洋牧場、イルカの国、船舶展示場、海浜公園、海洋文化館、水族館、シーサイド・バザール、各国の腕によりをかけた展示館とか、数々の多彩な催し物は、竜宮の乙姫様のもてなしにあった浦島太郎になったような楽しいものであろう。関係者の大変な熱意と努力により「海の祭典」としての沖縄国際海洋博の成功を疑わないが、筆者は更らに「明日への海」の期待をこゆて、真に沖縄にとり、日本にとり、世界にとって有意義だったといえるよう、参加者各人のいつまでも良い思い出となって残り、かつ又精神的な高いものをうち建てられるような海洋博を祈ってやまない。

（東海大学海洋学部教授・東京水産大学名誉教授）

沖縄海洋博の見どころ

鈴木　文彦

七月二十日の開幕を目前にして、今、沖縄国際海洋博覧会の会場、沖縄・本部半島の一角では、最後の総仕上げのため、熱気のムンムンたちこめる毎日が続いています。昭和四十七年二月、沖縄国際博覧会協会の発足以来、建設、運営両面にわたって続けられてきた努力の成果が問われようとしているのです。

●海洋博の基本構想

基本的な諸元の内、先ず会期は、昭和五十年七月二十日から、翌五十一年一月十八日迄、半年間正味百八十三日間となっています。観客動員のパターンとしては、何といっても夏休み中の七・八のふた月、沖縄で最も快適なシーズンといわれる十一月前後、それに沖縄出身で本土で働いている方々の年末年始休暇の時期、これらのシーズンがピークになるものと思われます。

会場はすでに触れたように、沖縄本島の北西部、本部半島の最先端で、面積はおよそ百万平方メートルに達しています。といっても五年前の大阪万国博に比べれば三分の一にしかすぎませんが、これは一般博覧会とは違って、特定のテーマに従った展示のみが許される特別博覧会としての性格上、当然のことかも知れません。それでも主催国日本を含めて参加国数三十二、国際機関四、非公式参加一、合計三十七という参加数は特別博としては、史上最大の規模に達しています。一方、総面積の四分の一の二十五万平方メートルが海それ自身であるという事実は、一世紀以上に及ぶ博覧会史上初めてのことで、規模のみならず内容の点でも極めてユニークな博覧会とすることが

●会場計画のあらまし

さて、海洋博の会場計画は、亜熱帯の島、沖縄の景観を最大限度に生かしたものといえます。青い海、青